

「体験版」

ご説明

「家庭教師姉妹 小さな妹と熟した姉 こっちのご褒美の方がいいでしょ？」に興味を持って下さり誠に有難うございます。

体験版は、製品版の一部を抜粋した物で全部で7ページ（内、挿絵が2ページ）です。製品版は、全部で29ページ、その内挿絵が13ページ（基本5枚、差分込みで13枚）となっております。

このPDFの電子ブックは、ページの表示方法を「見開き」、表示される大きさを50%前後、に設定されると見易くなるかも知れません。宜しければお試し下さい。

「どうしてこんなに点数悪いのよ！ あんたの実力はこんなもんじゃないでしょ！ 嫌がらせ？ 嫌がらせなの？」

採点したばかりの模擬テストを突きつけて、小柄な女の子は大柄な幼馴染を怒鳴る。

ちよろいものだと思っていた、資格試験の家庭教師アルバイト。教える相手は、秀才と評価される自分といい勝負をする男子だ。彼の家は裕福で、バイト料は破格な上に先払いだった。「大船に乗れたわ」と言う顔で渡された重い茶封筒の感触は今も忘れない。

と、反撃の怒声。相手も言われっ放しの大人しい性格ではない。

「つたく……そう言えば、あんたは百マス計算とか苦手だったわねえ……」

ひとしきりキヤイキヤイやって思い出した。ライバルは持続力に乏しく、人海戦術な問題数をこなす事は苦手としている事を。この試験はややこしい計算問題が豊富なだけに、その弱点が露骨に響いているのだろう。

なにはともあれマズイ状況だ。不合格となれば、人の好い親御さん方はバイト料返還要求などはしないだろうが、以後こんな美味しい仕事にありつけなくなるだろう。

しかも、この現状が露見すれば『アイツ』の介入の可能性が出てくる。そうなれば、今後ボロいアルバイトにありつける可能性ゼロパーセントに大確定。それだけは避けねば。

（ニンジンをつぶら下げるかあ……でも、あたしが持っててこいつが欲しがりそうな物と言えれば何かあるかしら……）

彼が言う事はあながち間違いいではない。生まれたままの姿になった身体は年齢不相応に華奢で、メリハリも少ない。

だが、健康的な色彩を放つ、仄かに膨らむ胸と先端に咲く赤い花。今にも咲きそうなものの未だに開かない、成熟した蒼い蕾を連想させる密やかな秘所。うっすら微笑む顔は、愛らしい少女のそれ。小柄な娘は大柄な幼馴染に異性を強く感じさせていた。

「見直した？ でもまだこれからよ。あたしが女だって思い知らせてやるんだから」

小さな家庭教師は、じっと見詰める教え子を跨ぐ。彼のものは、視線を外さない主の興奮を代弁して、既に幾分硬度を纏っている。断続的にドクンドクンと脈打ち、徐々に立ち上がってきていた。それを阻止する形で、小さな筋を描く割れ目が包み込む。

「あんなに馬鹿にした身体を見て、見てるだけでこんなに硬くしてたんだあ」

眼下に悔しそうに歯軋りする顔。しかし、その口からは否定の言葉が紡がれない。

勝利感が湧き起こり、身体が高揚する。オナナの部分と、自身の腹部に挟まれたオトコの脈動の力強さが大きくなっていく。ベクトルは違うのだろうが、やはり彼も昂ぶっているのだろう。見た目よりも。

小柄な娘は、割れ目で挟み込んだまま前後に腰を振り始める。まだ潤滑油が無い為に、全体が滑る事は無く、代わりに薄い皮ごと包まれる本体が刺激される。華奢な娘の全体重が、皮を介して充血した勃起を擦り上げるのだ。



数日後

「どう？ 私のおっぱいのお味は……」

媚びる上目遣いでそう言う彼女は幼馴染家庭教師の姉である。偶然、彼の母親から妹のアルバイトの事を聞かされ一計を案じたのだった。

お仕事奪っちゃお

アルバイト料までは聞かなかったが、家の裕福さと息子の溺愛ぶりを見れば、ボロい仕事である事は考えるまでもない。そして、自分も妹に劣らず優秀なのだ。

そうと決めたら行動は電光石火。早速、弟分をベッドに連れ込み籠絡を開始した。妹を蹴落とそうとする事に罪悪感を感じない。それ所か、奪い取る小気味良さで背筋がゾクゾクする。

「頑張ってくれたら、こんなご褒美も上げられるのよ、私は」

「私」と言う部分を強調し、下腹部と接着する豊満な胸をグニグニ歪める。柔らかな豊胸の中では、硬く膨張した勃起がビクビク脈動している。みっちりと圧迫されている為に震える事さえろくにできないが、それが支配される官能を彼に知らしめる。

「あの子にはこんな事できないでしょう？ 背中にも見える胸なのですもの」

亀頭部分を挟み込む柔肉への力を増やし、念入りに擦り上げる。上で、うつつと言う呻き声がした。



バンツ

「ちよつと、それはあたしのなの！ 盗らないでよ！」

勢い良く部屋の扉が開かれた。そこにいたのは小柄な幼馴染。

「ああ、帰ってたの。覗いていたの？」

「はぐらかさないで！」

「盗るなど言われても、もう決めて貰った事だから。それに、あなたより優秀で、ご褒美も魅力的な私が先生をした方が良いに決まっているのだし」

姉は涼し気だ。と、妹は齒軋りを止めて素早く衣服を脱いだ。ベッドに登り、それまでが嘘の様に男を誘うポーズをとる。

「ねえ、あたしの方がいいでしょ？ あんなにガッツイってくれたじゃない」

「あら、そんな台詞は私のアソコを見てからにして欲しいわね。見なさい、こんなに濃いのをたくさん射精してくれたのよ？ イく時の顔も、それはそれは可愛かったし」

「だったら、この場で白黒つけて貰おうじゃない」

「構わないわよ。あなたが可愛そうな事になるだけだけれど」

「何をボケつとしてるのよ！ さっさと比べなさい。あたしのピュアボディか、こっちのビッチか、どっちがいいか直に味わって判断なさい！」

「そう言う事になったから。またしましうね」